図工･美術科教育　理論研修会　終了報告

テーマ	これからの図工･美術教育～題材の在り方･ICT活用方法～
日　時	令和6年8月19日（月）
会　場	石狩教育研修センター
指導者	工藤　雅人　　氏 （恵庭市立恵庭中学校　校長）
参加者	46名

研修会の様子

研修が始まると同時に、和やかなムードを大切にするためグループづくりをし、自己紹介を兼ねて好きな作家についてお話することを提案されました。一気にその場が楽しく話しやすい雰囲気となり、その話術の素晴らしさを感じました。その後は「日本はなぜ美術という教育を必修教科としているのか」ということについて、参加者へ問いかけがあり、グループ討議を行いました。

今回は小学校の先生に寄り添った研修内容だったので、絵の「うまい」･「へた」について、幼児期の成長と表現について考えました。日本には、写実＝上手いという、視覚の再現性と技術に優れた写実的な作品をよしとする風土があることを改めて認識しました。また、知覚と表現についての話では、子どもの発達段階には視覚型･触覚型･中間型があり、成長とともに変わる子どもの意識や描く行為について語ってくれました。

「日常の図工･美術や美術の授業において、子どもが美術を苦手になってしまう話はよく聞きますね。」という話題から、“なぜ、美術が苦手になってしまうのか？”について語ってくれました。子どもが何かを描くとき、ものを観察し主観性の強い概念的な要素から描きます。客観的にみると一般化された形態の認識が合っていないことがありますが、それは成長段階によって異なり、子どもは自然に、もしくは指導によって徐々に獲得します。しかし、教師が子どもの認知と合っていない指導を行うことで、苦手意識にさせてしまうのではないかというお話がありました。

これからのICT活用方法の在り方についてのお話では、授業で活用する場面はどのような場面なのかについてお話がありました。活用場面としては、発想や構想の資料探しや鑑賞の際の作品提示等の紹介がありました。「しかし、現在の生徒のタブレットの画素数では美しい色がでないのでそれが残念です。せめて美術の授業用のタブレットがあればもっと美しい色合いを見ながら楽しくワクワクしながら授業できるのに」とその考えも語ってくれました。

最後は美術教育について、「子どもに絵を描かせることは画家の養成を目的とするものではありません。それは人間の内にある感性の芽を育てて、人間として健全な豊かさや直観力･創造力を発達させるためです。私たちが目指す美術教育の目的は、美術的諸能力の育成ではなく、美術の特性を生かした創造的人間形成であり、美的価値観の形成を通して人格形成を担う美術教育の提供である」という最後の言葉も心に残りました。参加者からは改めて美術教育の大切さや子どもとどう向き合うのか理解できたという声があがっていました。とても充実した研修でした。